

【エピソード記録】 < 4 歳児 5 月頃 >

A 児たちは、昨日から積み木を黒い布で覆ってお化け屋敷を作り、客として友達を呼び驚かして楽しんでた。A 児は、白い紙にお化けの絵を描きそれを切り取って黒い布に貼っていた。貼り終わると、クラスの友達をお化け屋敷に誘った。友達数人が「ちっともこわくない」と言い、それを聞いた A 児は、少し涙ぐみながら教師に「こわいお化けを作りたい」と伝えにきた。教師は、① A 児の思いを受け止め、黒のポリ袋をもってきて A 児と一緒にお化けの服を作った。 A 児はその服を着てお化けになりきり、友達を驚かして楽しんでた。⑦ さらに A 児は、ポリ袋にマジックで目や口を描き、遊びを楽しんでいた。

①の下線について
教師は、子どもの思いを受け止め、実現できるように、安易にアイデアを提供するのではなく、子どもたちが思いや考えを出している中でタイミング良くアイデアを提供した。そうすることで、⑦のように自分の力で、遊びを工夫するようになった。

【エピソード記録】 < 5 歳児 1 1 月頃 >

B 児は、仲の良い C 児が鉄棒で逆上がりをしている姿を見て、自分も挑戦しようとしていた。繰り返し挑戦していたが、できずにいた。C 児や教師の補助を受けながら、1 週間ほどするとできるようになった。教師は「B くん、頑張ったね」と声を掛けたが、B 児は浮かない表情をしていた。B 児の手にはマメができていた。教師は「このマメは、頑張った人だけにできるんだよ」と声をかけた。でも B 児は「もうできない、痛い」と言うばかり。② 教師は、「痛いけど、絆創膏貼ったら大丈夫だよ。他の友達も絆創膏を貼って頑張っているよ。もうちょっと頑張ってみよう」と励ましたが B 児の耳には入らず、すっかり減入った表情をしていた。

②の下線について
教師の願いを先行するのではなく、言動から子どもの内面を読み取り、子どもの気持ちに寄り添う言葉を掛けるなどの援助を心掛けた。